

谷川前代表が寄稿

創立80周年記念誌 感謝

創立80周年記念誌の編纂は「北見赤十字病院創立80周年記念誌制作編集委員会」が行うことになり、委員長に相原

事務部長、委員に上野副院長兼看護部長外の皆さんが選ばれ、南参事外が編集委員会事務局を担当しました。

古い資料・写真の整理、各部門の現況、外部の寄稿者への依頼など膨大な取材と編集作業が続いたのです。

記念誌はグラウンドオープン・創立80周年記念の式典までに仕上げなければなりません。日常の業務の後、記念誌制作に取り組んだスタッフのご苦労は大変なものだったと思っています。「創立80周年記

念誌・この地と共に歩んだ80年に感謝を込めて」は先日完成し、今回の式典で贈呈されました。

■吉田院長外各界の皆さんからのメッセージ「80周年記念誌に寄せて」から始まり、

■この地と共に歩んだ80年、各団体代表からのメッセージ「創立80周年に寄せて」の数ページがあり、その中に谷川前代表の寄稿が掲載されています。

創立80周年記念誌 感謝、表紙



創立80周年記念誌

この地と共に歩んだ80年に感謝を込めて



日本赤十字社 北見赤十字病院

編集後記

昨年12月16日、会の例会で、谷川代表が辞意を示し、その後、何度か、役員会で辞意の取り扱いと新代表の選出について話し合いをしました。円満に結論を得、役員選出案を総会に提案しました。

創立80周年に寄せて

突然、両の眼が見えなくなった。

母がリヤカーで北見赤十字病院の小児科に連れて行ってくれた。女医先生が「これは内科、つまり肺結核が原因です」とアメリカから入って来たばかりだという「パス」を処方してくれた。

眼は、10日ほどで見えるようになった。それから2年間、5年、6年のときに東小学校からの帰りに、北見赤十字病院に通った。当時、結核は「不治」の病、多くの人が命をなくした。ぼくは今も、40代とおぼしき女医先生の一見無愛想な顔を忘れることが出来ない。簡単な手術をして10日ほど入院した。退屈のつれづれに院内を散策をした。内科外来まで来ると、待合室が暗かった。内科医が1人も居なくなって診療されていないからと知った。100人近い医師、500人の看護師が日夜、医療活動をしている北見赤十字病院に「内科医」が1人も居ないという、それは大変なことだと思った。何かしなければ、と思った。そのための「会」を作らなければ、と思った。若くて優しい看護師にメモ用紙をもらって、深夜のベットで、まずは会の名前を考えた。

行きつ戻りつして、「北見赤十字病院の明日を考え支援する会」と。次に会の活動の趣旨を呼びかける文章を考えた。そして、退院した。

60人余の友人、知人に「呼びかけ」の文書を送った。そして会が生まれて、しかし、何をすればいいのか。真壁課長、廣川課長、遠藤係長と会員が膝をまじえつ、院内を見学させてもらった「活動」が始まった。

それから2,000余日。第51回日本赤十字社医学会総会を1週間後に控えて、会は、「パネル展」の準備をしている。

副代表の逢坂信治、事務局長の阿久津俊子、会計の阿部孝子と会員達が、代表とは名ばかり谷川を支えてくれた地域医療のためのささやかな活動を、今日も、明日もと思うばかりなのである。

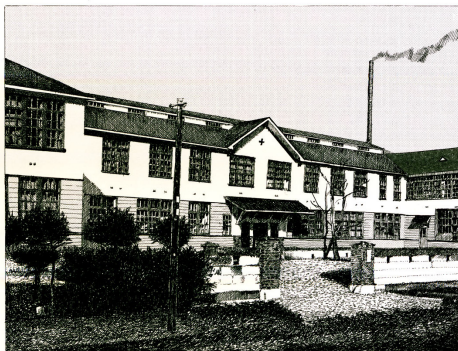


北見赤十字病院の明日を考え支援する会

代表 谷川 勝男



研修医を対象とした「北見での思い出づくりの集い」



画 小岩辰男 旧館病院スケッチ

■新病院建設への思い(吉田院長)、これからも未来と共に、各部門紹介など250P程の立派な記念誌です。

今回の総会で、代表の仕事をやる事になりました。ご指導のほどよろしくお願ひします。(逢坂)